HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イラン地方都市における家族経営の現在 ： アルダビールの事例分析
Author(s)	村上, 明子; ハサンザーデ, モハンマド
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 6, 95-111
Issue Date	2017-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66568
Type	departmental bulletin paper
File Information	081Murakami.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第 6 号
北海道大学　2017 . 3

＜研究論文＞

イラン地方都市における家族経営の現在
－アルダビールの事例分析－

村上　明子・ハサンザーデ　モハンマド

【要　約】革命以降のイランは変動幅が大きい不安定な社会と言える。特に 2002 年に核開発問題が表面化して以降のイラン経済は，経済制裁の影響が色濃く内外に厳しい状況が続いてきた。現在は 2015 年 7 月の核協議合意によって核開発関連の経済制裁は解除されており，空前とも言えるイランブームに沸き立っている。これまで村上は，イラン社会経済の特徴を観察するため主に首都テヘラン市で労働市場や社会貢献活動の調査を行ってきたが，地方社会の構造把握や現代的課題への接近は十分とは言えない状況だった。

そこで我々は 2016 年の 7 月から 9 月にかけて，イランの北西部のアルダビール市である紡績業の経営者家族に密着し，企業経営から家族・親族・近隣住民との繋がりに至るまでその日常を詳細に追跡した。アルダビールは住民の大半がトルコ系のアゼリーであり，言語や生活習慣に地域独特の要素が存在する。本稿では，イラン特有の社会情勢を念頭に置きながら，同国地方都市における家族経営の現状と地域社会における今日的意義を明らかにしていく。

【キーワード】イラン，アルダビール，家族経営，アゼリー，紡績業

はじめに

革命以降のイランは変動幅が大きい不安定な社会と言える。特に 2002 年に核開発問題が表面化して以降のイラン経済は，経済制裁の影響が色濃く内外に厳しい状況が続いてきた。しかし 2015 年 7 月に核協議が最終合意に達し，翌 2016 年 1 月に核開発関連の経済制裁が解除された [1] ことで，現在は空前とも言えるイランブームに沸き立っている。こうした中央政治や対外環境の変動はイラン地方社会をどのように規定しているのだろうか。特に地方の中核都市において，都市的要素と在来の行動様式・価値観の相互作用の編成論理に，かかる時代背景がどのように影響するのだろうか。そしてこれらを現地の人々はどのように評価しているのだろうか。

そこで我々は 2016 年の 7 月から 9 月にかけて，イランの北西部のアルダビール市在住のある紡績業の経営者家族に密着し，企業経営から家族・親族・近隣住民との繋がりに至るまでその日常を詳細に追跡した。アルダビールは住民の大半がトルコ系のアゼリーであり，言語や生活習慣に地域独特の要素が存在する。本稿では，イラン特有の社会情勢を念頭に置きながら，同国地方都市における家族経営の現状と地域社会における今日的意義を明らかにしていく。なお，本研究の分担状況は以下の通りである。調査計画や調査票のフレームワークは村上が作成し，ハサンザーデがアルダビール特有の状況についても加味することで完成度を高めた。調査対象への参与観察，関係者へのアンケート，インタビューなど調査全般は村上が実施し，共同で分析・考察を行った。

以下，第 1 章にて革命後のイランの概況と地域社会について既存の議論を整理し，第 2 章でアルダビールの特徴を概観する。これらを踏まえて，第 3 章では調査企業の概況や従業員の意識，そして経営者とその周辺の日常を確認し，イラン地方社会の現在についてその特徴を考察する。最後に

1）イランによるテロ支援，人権侵害，ミサイルその他の武器供与を理由に，米国・EU・国連は引き続き経済制裁を課している。その最新状況については Katzman [2016] を参照のこと。

総括と今後の課題を述べることとする。

1. 中央体制と地方社会

ここでは既存の研究成果を概観し，本稿独自の分析視角を提示したい。

まずは議論の前提を整理するため，イランにおける経済・社会運営変遷の概要について述べる。革命後のイランでは，戦争と国際的孤立，そして経済制裁といった特殊な制約に見舞われる中で「革命の理念」と「経済発展」「生活水準の向上」との両立が模索されてきた。内外事情の変動もあって，社会経済の運営について幾たびか方向性の見直しがなされてきた。具体的には，①革命直後からイラン・イラク戦争期（～ 1989 年）／②戦後復興期（1989 年～ 1997 年）／③ハータミー政権下の自由化推進期（1997 年～ 2005 年）／④アフマディネジャード政権下における分配構造の再編成期（2005 年～ 2013 年）／⑤ロウハーニー政権下の現実路線期（2013 年～現在）－以上のように各期を特徴付けられる。特に指摘しておきたいのは，今世紀以降の全ての大統領は 1 期目の選挙当時，本命候補ではなかった点である。近年のイランでこのように体制内での政策変動が顕著な点について，吉村は「『ヴェラーヤテ・ファギー』体制[2]の成立から四半世紀以上が過ぎ，『開かれた』イランを強く迫る国際環境の下で，多くの人々は今一度自らのアイデンティティを模索し，呻吟を繰り返している[3]。」と述べている。このように革命後のイランでは，イスラームをベースにした社会統合と発展が独自の理論を元に模索されている。イスラーム共和制を掲げるイランでは「現代性（モダニティ）」と「伝統」は相反する要素ではなく，両者の共存を前提とした発展が模索されていることが特徴とモガダムは指摘している[4]。

他方で革命以前からの連続面としては，中東産油国特有の石油依存の経済構造[5]がある。実はこうした経済構造と革命後の変化－すなわち政治体制や社会規範－とが，互いに密接に関わり影響を及ぼし合っているという。モガダムによれば，イラン社会は，経済的にはレンティアエコノミーであり，政治プロセスに関しては権威主義的であり，なおかつジェンダー関係については保守的で，それらが相互に作用し合うことで，各要素が強固に保持され続けているとしている[6]。つまり巨大産油国であるイランにおいては，石油が資本蓄積には有益に作用するものの，政治・経済にまたがる独特の石油依存体質に陥ることで，それが社会規範のあり方にも影響を及ぼしているとしている[7]。またイランでは社会を構成する基本単位は家族であり，そこでの性別役割規範を基に社会的人格が形成されてきた[8]。このような状況をモガダムは「家父長的ジェンダー契約：patriarchal gender contract」と評し，両性の社会的配置は明確な契約関係にあることを指摘している。イランの社会状況を端的に示した文言であると言えよう。また館山によれば，マクロ経済から見たイランは「不十分な分配国家」としての特徴に生産国家的側面やポピュリズム的側面が付け加わることで，経済社会構造が複雑化しているという[9]。

2）イラン革命の指導者であるホメイニ師によって提唱され「法学者による統治理論」と訳される。イスラーム法学者が宗教指導のみならず，政治的実権の確立・行使の正当性についてシーア派教義を理論的支柱に説いたものである。この理論の詳細は R.M. ホメイニー／富田訳〔2003〕，導出された背景については富田〔1993〕，近年の実践状況，特に政治的局面への影響については駒野〔2014〕を参照のこと。

3）吉村〔2005：304〕。

4）Mehran, G. [2003：270].

5）直近の中央銀行レポートによれば，2014 年度の石油・ガス関連収入が政府収入に占める割合は 35.4％であった。また 2014 年度は国際石油価格の値下がりで石油・ガス収入が大きく落ち込んだ年であったが，それでも全輸出に占める割合は 64.0％に達した。なお 2012 年，2013 年は共に 70.0％である（Central Bank of Iran[2016: 21, 24]。

6）Moghadam, Valentine M. [2005：110-111].

7）*Ibid*. [122-123, 131-132].

8）村上 [2013：154]。

9）分配国家」とは，中東産油国の国家と社会の関係についてルキアーニらによって提唱された概念であり，「農業や工業などの国内の生産基盤がきわめて脆弱でありながら，国外から巨額の収入が国庫に流入し，財政を通じたその撒布（＝富の分配）によって国民経済が維持される国家」（館山，［1998：26］）とされる。イランの場合は「工業化とその基盤整備に力を注いできた」（館山，〔前掲書：27〕）ことから「不十分な分配国家」と位置づけている。以上については，館山［1998］を参照のこと。

なお，イラン・マクロ経済政策で注目すべき点として，2016 年度より始まった第 6 次 5 ヵ年計画とそのスローガン「抵抗経済」が挙げられる（**図 1** 参照）。2015 年 7 月に核開発問題解決に向けて関係六カ国での協議がまとまるまで，交渉の経過は決して順調とは言えなかった。結果としてイランへの核開発関連の経済制裁は解除されたが，先行きに不透明さは残っている。しかも中東情勢が複雑化・緊迫化する中で，イラン＝米国関係は革命以来の雪解けムードを醸し出しているが，これに対してサウジアラビアやイスラエルは警戒感を強めている。こうした地域情勢や経済制裁解除がスムーズに進まない場合に備えて，ハーメネイ最高指導者は 2015 年 1 月より「イランは制裁の影響を受けないようになるべきであり，敵の力を制限する唯一の方法」とする「抵抗経済」の重要性を説いてきた。なお，第 6 次 5 ヵ年計画の内容は 80 項目からなるが，その主要項目は①抵抗経済，②科学技術の進歩，③文化的卓越の実現に集約される。また，この計画の具体的数値目標として年平均 8％の成長が掲げられている。他方で地域大国にふさわしい軍事能力を確立すべく予算の少なくとも 5％を防衛費に割り当てるよう計画されている点も「抵抗経済」と特に関連する指標として注目される [10]。

このような社会情勢の中で，イラン地方社会はいかなる変遷を遂げてきたのだろうか。一般にイランは地方偏差が大きい社会とされている。加えて，地方の主要産業は多くの場合，農林漁業やペルシャ絨毯を典型とした手工芸品である。したがって，イラン地方社会論の主な関心事項は，農村社会の生産・所有関係の解明，革命前後を通した政策体系の波及効果の計測，伝統的な技術・知識体系の評価等であった。特に農村社会論は議論が重ねられており，ラムトンによる革命以前の伝統的な地主 ― 小作関係の解明 [11]，後藤による農村社会の近代化や王制期農地改革の評価 [12]，大野によるイラン中部農村での革命前後 25 年に及ぶ定点観察 [13]，原による土地なし農民（ホシュネシィーン）層 [14] 研究 [15] などが代表的な成果と言える。他方で，イラン革命後の農村社会の変容については鈴木が全国横断的な実証研究を行っている。イラン農村部における都市化現象に着目した鈴木は，革命と対イラク戦争を契機に出現した人口 2,000 人から 20,000 人の地方中小都市を「ルースター＝シャフル」と名付け，その経済社会構造上の特徴を明らかにした [16]。これらイラン農村社会論の先駆的な成果によって，「農村部における土着構造」や「農村的要素と都市的要素の構造変容」は検討が進められてきた。それに対して本稿は，「地方の中核都市における都市的要素と在来の行動様式・価値観の相互作用」の現状を，地方経済の担い手に着目して考察するものである。

ハーメネイ最高指導者の肖像画付きで描かれている
（アルダビール市内で 2016 年 8 月撮影）

図 1 「抵抗経済」のスローガン看板（左）

なお，近年の国際関係やそれに基づくイラン社会の変動について，村上はかつてテヘラン首都圏とエスファハーンで労働市場論をベースに事例分析を行った [17]。本稿では国際関係や中央政治が地方の経済・社会構造にどのような影響を与えているのか，またそれに対する現地の人々の評価の実

10）Khamenei.ir [2015.6.30].

11）Lambton[1953].
12）後藤〔2002〕。
13）大野〔1990〕。
14）ホシュネシィーン（khoshneshīn）については「土地なし農民」という訳語が定着しているが，実態からすると「農村雑業層」との訳が適切であろう。
15）原〔1990〕。
16）ペルシャ語の「ルースター（rūstā：農村）」と「シャフル（shahr：都市）」を組み合わせた鈴木独自の概念である。こうした地方社会の構造変容は革命後のイラン政府の地方政策の結果であり，農村部の生活レベルが全国横断的に向上した事実が鈴木によって明らかにされた。詳細については鈴木〔2011〕を参照のこと。
17）村上〔2013〕。

態について，アゼリー民族が住民の大多数を占めるという地域独特の要素を加味しながら検討を進めていく。

本稿の調査対象はアルダビールで紡績会社を経営している A さんとその周辺である。アルダビールの絨毯産業は伝統ある地場産業として名高いが，実は紡績業は当該地域で比較的新しい産業であり，かつ近年は業況が思わしくない（詳細は第 3 節で述べる）。また A さんについては企業家としての側面だけではなく，親族・コミュニティ内での立ち位置などその活動領域全般と思考様式・行動パターンの相互関係性が検討対象となる。先に述べた「地方の中核都市における都市的要素と在来の行動様式・価値観の相互作用」と照らし合わせ本稿の意義をより具体的に述べるなら，刻一刻と変化するイラン社会の中で地方都市立地の企業活動の実態を明らかにし，そこでの生産領域／再生産領域の相互作用の在り方と，それを形作る論理を現地の視点から評価することである。これによって現代イランにおける地域偏差の一端が明らかになるだろう。以上から本稿は企業家論や地場産業論ではなく，イラン社会論からアプローチしていく。

2. アルダビールの概況

アルダビール州はイランの北西部に位置し，カスピ海ならびにアゼルバイジャンと隣接している（**図 2** 参照）。**表 1** からは就業構造に占める農業の比率が相対的に高いことが分かる。調査を行ったアルダビール市は州都であり州内人口の 45.2％が集中している。その住民の大半がトルコ系のアゼリーであり[18]，言語や生活習慣に地域独特の要素が存在する。日常会話で用いられるのは圧倒的にアゼリー語であるが，体系的にアゼリー語を学べる教育機関は存在しない。そのため，アゼリー語は家庭を中心としたインフォーマル教育で継承されている。**表 2** は全国と首都を擁するテヘラン州，そしてアルダビール州の識字率を示したものだ。アルダビール州の識字率が全国平均を下回っていることが確認できるが，その理由として中高年層の非識字者の多さや遊牧民の存在が挙げられる。なお，アルダビールの非識字者は公的教育機関で国語であるペルシャ語教育を受けていないことを意味する。その場合，アゼリー語話者以外とのコミュニケーションが困難であるため，活動範囲に制限が生じてしまうことがある。

他方でアルダビールは，性別役割規範や男女の空間分離規範が強く作用する保守的・伝統的な土地柄として知られ，女性では外出時にチャードル[19]

図 2　調査地の所在

表 1　アルダビール州の基本指標

人口（単位：人）	1,248,488（イラン全体の1.66%）
GDP（単位：100万リヤル）	77,460,210（イラン全体の1.06%）
就業構造	農業：35%，鉱工業：27.7%，サービス業：37.3%

出所）アルダビール州経済財政局，2013 年，『アルダビール州の経済情勢レポート』

表 2　識字率（2011 年，単位：%）

全国		テヘラン州		アルダビール州	
男性	女性	男性	女性	男性	女性
88.4	81.1	92.3	88.6	86.8	74.6

出所）Statitical Center of Iran [2016]

18）民族構成の詳細についてイラン政府は調査・公表していない。

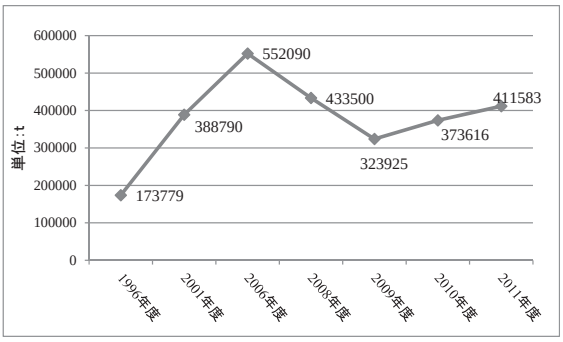
19）イラン女性の衣装。大きな楕円形の形をしており，頭から被ることでイスラーム・ドレスコードに則り全身を覆い隠すことが出来る。外出時に着用されるものとしては黒が多いが，白を基調とした礼拝用のもの，各地独特の図柄を織り込まれたものなど，多様なチャードルが存在する。

をまとう「チャードリー」も多い。なおイランでは女性が外出する際，お尻を完全に覆い隠すコートと「ヘジャブ」と呼ばれるヴェールの着用が義務付けられている（ヘジャブの実践については次章で改めて言及）。こうしたイスラームのドレスコードの実践状況は画一的ではなく，地域や家庭毎に多様なバリエーションがある。村上が見聞きした限りアルダビールでは，チャードリーでなくても露出を控えた伝統的なドレスコードを好む者が多い印象であった。例えば，テヘランの若い女性の間では現在，「ビードギュメ（bī-dogme）」と呼ばれる外出用コートが大流行している。これは左右の前身頃を留めるボタンがなく前がはだけるようなスタイルになるが，アルダビールでビードギュメのコートを外出時に着用している者は全く見られなかった。村上との雑談の中でも「あのようなコート（＝ビードギュメ）での外出は女性にとって好ましくない」という声がよく聞かれた。

表 3　従業員 10 人以上の製造業規模別事業所数

	10-49人	50-99人	100人以上	総数
全国	10,355	2,200	2,230	14,785
アルダビール州	139	19	9	167
テヘラン州	1,641	390	409	2,440

出所）Statitical Center of Iran[2016].



出所）Statitical Center of Iran [2016].

図 3　繊維製品生産量の推移

服装規範一つとっても伝統が尊重され，地域特有の傾向がある様子が見て取れる。またイランには「嫁を迎えるならアゼリーから[20]」との格言があるほど，アゼリー女性は働き者として認知されている。これ以外にも一般に認知されているアゼリーのイメージとして「勤勉」「切り盛り上手」「商売上手」といったものがあり，例えば「バッカーリー」もしくは「マガゼ」と呼ばれる小規模スーパーマーケットや「ヌンヴァーイー」と呼ばれる伝統的なパン屋の経営者は，特に都市部においてはアゼリーが多いと言われている。

また本稿の調査対象の地位を確認するため，**表 3** に従業員規模別の製造業事業所数を示した。次節で改めて言及するが，調査対象の R 社は羊毛紡績会社で，従業員数は 26 名である。一般に中小と位置付けられる従業員規模であるが，この規模の事業所はアルダビール州内には 139 所のみである。また，調査企業の業況に関連して，イラン繊維製品の生産量推移を表したのが**図 3** である。羊毛単体のデータはなく繊維製品全体の推移であるが，生産量が落ち込み，回復の兆しが見える 2011 年時点でもピーク時と比べて 10 万 t 以上のギャップがあることが分かる。次節では，このような全国的傾向を踏まえた上でアルダビールの紡績業の変遷を確認したい。

労働市況については，**表 4** に性別の労働力化率と失業率をまとめた。女性に関しては，労働力化率がテヘランおよび全国の水準より高い。イランの場合，若年者層の人口割合が相対的に高いことや高等教育就学者数の伸長もあって，近年，労働力化率は低下傾向にある。非労働力人口に占める主婦と学生数の州別データが公表されていないことから推測の域を出ないが，アルダビール女性の労働力化率が相対的に高い背景には，首都圏との

表 4　労働力化率と失業率（10 歳以上，単位：%）

	全国		テヘラン都市部		アルダビール都市部	
労働力化率	男性	女性	男性	女性	男性	女性
	63.2	13.3	61.7	11.2	65.4	13.7
失業率	9.3	19.4	7.6	23.1	11.4	15.8

出所）全国のデータは Statistical Center of Iran[2016a] より 2014 年度の速報値であり，
テヘラン，アルダビールのデータは Statitical Center of Iran [2016b〕より 2013 年度の数値。

20）「嫁を迎えるならトルコ（民族）から」との表現もある。

教育機会の差異と女性の稼得労働に好意的な環境という二つの要素が推測される。またアルダビール州の都市部では男性失業率が全国平均よりも停滞気味であるのに対し，女性の失業率は全国ならびにテヘラン州の水準よりも好調である。したがって，アルダビール都市部の労働市況は厳しいものの，女性に関する労働需給は相相対的に良好とも言える。先述のとおり，性別役割規範も空間分離規範も相対的に強固に作用している（とされる）アルダビール社会において，このような結果となるのは何故だろうか。この点にも留意して現地調査分析を進めていきたい。

なおアルダビールは冬季の冷え込みが厳しく最低気温がマイナス 20° を下回ることも珍しくない。そのため夏季と冬季では生活形態が大きく異なり，外出を伴う活動や友人・知人・親族間の行き来は夏季に活発化する。したがって本稿の調査結果は季節性という限定要素を伴うものであることを指摘したい。

3. 調査結果

繰り返し述べてきたとおり，イランでは地域ごとの偏差が大きいとされる。それはエスニック集団や習俗の違い，また中東特有の制約的な自然環境によってもたらされる生産構造の差異によるものと考えられている。こうした各地特有の要素と中央集権的要素によって規定される制度的枠組み，そして時代背景は，アルダビールの経済社会構造や生活実態にどのように作用しているのだろうか。2016 年 7 月から 9 月にかけて，我々はアルダビールの紡績会社経営者と日常を共にし，その様子をつぶさに観察した。アゼリー文化の色濃い地方社会での経営者の日常から，その現代的特徴や社会コンテクスト上の意義を検討していきたい。なお，資料の制約から R 社の財務・会計状況の客観的な把握は難しく，我々がアクセスできないコミュニティ活動もいくつかあった。しかしこうした調査の制限自体が現代イランの社会的現実を如実に反映したものと言えるだろう。

調査時における為替レートは 1 円＝約 340 リヤル（自由市場レート）であった。また本章で用いた図表の出典は，全て我々の調査によるものである。

3-1. R 社の概況：社長 A さんのインタビュー

本節では A さん一家が紡績業に参入した目的や経営史の概略，そしてアルダビールの経済社会状況について A さんとその家族へのインタビューを元に明らかにしたい。

A さん一家がこの R 社の経営に携わるようになったのは 1973 年（イラン暦：1352 年），A さんの父親の代からである。元々，A さんの父親は絨毯用ウールを扱うバーザール商人であった。したがって業務上の繋がりがあったことから当該企業の株主ではあったが，経営には直接携わっていなかった。当時イランはオイルブーム [21] 前夜で好景気だった。しかもアルダビールの絨毯生産が好調だったこともあり，A さんの父親が紡績業の経営に乗り出すことになった。

ペルシャ絨毯の素材は産地によって異なる。ウール素材のペルシャ絨毯の名産地としてよく知られているのはエスファハーン，カーシャーン，タブリーズ，アルダビール等である。しかしアルダビールでは良質の羊毛は産出されない。寒さが厳しいことからアルダビールでは冬期 6 ヶ月間は羊を室内に入れる。このような生育環境のためかアルダビールの羊は毛質が固く [22]，パイル織り [23] の

21）1973 年に勃発した第四次中東戦争を受けて，OPEC 加盟のペルシャ湾岸産油国が原油公示価格の引き上げを決定した。これによって石油消費国側はオイルショックと呼ばれる不況に襲われたが，原油生産国であったイランでは石油関連収入が増大し，オイルブームと呼ばれる未曾有の好景気となった。

22）羊の家畜化はイラン高原で始まったと考えられており，ハンムラビ王時代（前 1792 年～前 1750 年）のバビロニアではすでに採毛用と食肉用それぞれの羊が存在した。なおイラン産の羊毛はオーストラリア産のメリノ種に比してごわごわしているが，強く，光沢があるため絨毯織りに適した毛質である（Wulff, [1966: 185]）。

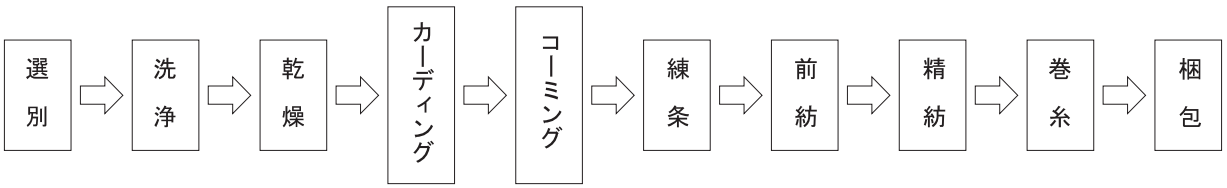
23）ペルシャ絨毯は経糸・横糸・パイル（ループ）糸から成り，経糸にパイル糸を絡めて結ぶ。横方向にパイルを一列作り終えるごとに横糸を通して打ち込み，織り目を安定させる。このようにペルシャ絨毯の繊細なデザインはパイル糸によって構成されるため，パイル糸の素材がペルシャ絨毯の素材となる。なお，パイル織以外の絨毯としては経

ペルシャ絨毯の素材には不向きである。ペルシャ絨毯向きの良質な羊毛産地としてはイラン西部のコルディスターンとケルマンシャー，北西部のギーラーン，そして東部のホラーサーン地方が名高い。つまりアルダビールは絨毯産地として名高い一方で，原材料調達を他の地域に依存するという状況であった。A さんの父が紡績業に参入した理由は，まさにここにあったという。なお，R 社では絨毯素材用の羊毛紡績の他に，アクリル糸の前紡・精紡処理も請け負っているものの染色設備はない。

原料の供給地に関して，R 社ではホラーサーンやケルマンシャー，そしてギーラーンを中心に買い付けている。買い付け先は季節によって異なり，原料買い付けのためイラン各地に頻繁に出張する必要がある。こうした商談をスムーズに進めるため，A さんはケルマンシャー，エスファハーン，ヤズドに出張時用の家を所有している。このように R 社はイラン全土から質の良い羊毛を仕入れ，絨毯素材用に加工して出荷している。「手織りのペルシャ絨毯は長期間踏み込まれることでパイルの編み目が固くなっていく。だからペルシャ絨毯は使い込むほどに質が良くなるが，このように強く破れない高品質の絨毯を織るためには高品質の毛糸が必要で，我が社の毛糸は手織り絨毯用として最高品質だ。（ウール素材の絨毯産地として名高い）エスファハーンの紡績会社よりずっと良い品質だ。」（A さん談）

6 年前に A さんの父親が亡くなり，現在，会社経営における意思決定は主に A さんが行っている。A さん以外の主な株主は，A さんの母親，A さんの娘，A さんの二人の弟である。しかし A さん以外の家族が，定期開催の理事会に株主として出席する機会はそれほど多くないとのことだ。特に A さんの母は非識字者であり，ペルシャ語は理解できない。こういった事情もあって A さんの母親は株主だが経営にはほとんどタッチしていない。他方で A さんの弟は二人ともバーザール商人であり，一人はペルシャ絨毯や原材料のウールを，もう一人は椅子やソファーなど布張りの家具を扱っている。したがって彼らと A さんは，業務上のつながりがあり，例えば絨毯の市況や原材料の調達情報について身内ならではの情報交換を頻繁に行っているということだ。他にもバーザールで商売をしている親族が複数おり，彼らの持つ人脈や情報が R 社の運営に活用されている。また 2 年前より A さんの娘婿 H さんがエンジニアとして調査企業で働いており，機械類の保守・管理を一手に引き受けている。

現在，調査企業はアルダビール市郊外の工業区域[24]に立地している。15 年前までは市内別所で操業していたが，**図 4** で示した通り，紡績の各工程では洗浄剤・泥滓・油等を含んだ汚染水を排出してしまう。したがって，排水処理を中心とした周辺環境への配慮は紡績業の重要な課題となっている。以前の立地は住宅地と近接していた。従業



・カーディング：洗浄処理後の羊毛を解きほぐし，不要物を除去した後にシート状に薄く伸ばす。
・コーミング：シート状になった羊毛に加油しながら梳り，細く引き伸ばす。
・練条：繊維をそろえてひも状にしたものを数本ずつまとめて均一な太さになるよう加工する。
・前紡：練条した繊維束を細く伸ばし，２本ずつ撚り合わせる。
・精紡：前紡工程で加工された「粗糸」をさらに細く撚り合わせる

図 4　調査企業の生産工程

糸と横糸のみからなる「キリム」，ほぐした羊毛を圧縮したフェルト状の不織布「ナマド」などがある。キリム，ナマド共にアルダビール州内各地で伝統工芸品として生産されている。

24）アルダビール市の工業区域は現在，2 つの区画が整備されており，R 社が立地するのは第二工業区域である。

員にとって通勤面では便利であったが，生産性の向上と周辺への配慮というジレンマを抱えていた。そうした中，新たに整備された工業区域のインフラ整備や税金面の優遇措置が採られていたことも移転の後押しとなった。現在の R 社は二棟から成る生産ライン，原材料保管庫，在庫保管庫，男性従業員の休憩所・シャワーと会議室を併設した事務所，女性従業員用の休憩所という施設構成となっている。

さて，紡績業は各工程で機械設備を要する。A さんにとって設備投資や維持費は悩みの種となっている。A さんは，設備投資や工場移転のために組んだローンを今もなお返済中である。しかし，工場が古くなってしまったこと（**図 5** 参照）に加えて，今は絨毯マーケットの動向が思わしくなく紡績業にとっても厳しい状況だという。以前はアルダビール市内に紡績会社が 3~4 社あったが，A さん以外の経営者は皆，それらの会社を畳んでしまった。

「父が工場の株式を取得した当時，アルダビールの絨毯産業は本当に好調だった。絨毯産業が牽引して紡績業も発展した。かつてはアルダビール産のウールが全国のペルシャ絨毯素材の 50％を占めたこともあった。当時はオーストラリア，ニュージーランド，アルゼンチン，ウルグアイから（原料の）良質な羊毛を輸入出来ていたことも大きい。今は原料の輸入もほとんどなくなってしまった。」（A さん談）

業況が厳しい理由について A さんは，経済制裁と競合先の多様化，そして主要輸出国での生活スタイルの変化を指摘している。主要マーケットのうちアメリカは経済制裁の影響で輸出が激減したとのことで，「経済制裁はイランの全てを破壊した。制裁のせいで 10 年間，イランは何一つ進歩出来なかった」と語っている。このような市況評価から，イラン政府の国際関係評価が地方でも共有されている様子が伺える。また原料の輸入が難しくなったことも，経済制裁とその帰結としてのイラン・リヤルの価値低下があるだろう。他の主要輸出先であったドイツとトルコでは，住宅事情の変化やライフスタイルの変化で需要が減少した。特にドイツ在住のイラン人家庭では生活スタ

図 5　工場外観

図 6　洗浄工程

図 7　巻糸工程

図 8　女性専用の休憩所

イルの現地化が進んでいる様子だ。

このように主要輸出国でのペルシャ絨毯の需要落ち込みは，アルダビールの絨毯産業に大きな打撃を与えているとのことだ。そのため，現在R社のウールはアルダビール州内への供給がかなり少なくなっている。取引先はイラン全土に及ぶが，最大の出荷先は隣接する東アゼルバイジャン州の州都・タブリーズとのことだ。

R社の従業員は男性18人，女性8人である。男性18人の職務構成は，生産ライン担当14名，他は会計・渉外担当1名，エンジニア1名（娘婿のHさん），運転・雑用担当1名，守衛・雑用担当1名，女性8名は全て生産ライン担当である。生産ラインは6年前までは2シフト制[25]で稼働していたが，現在は単一シフトだ。残業は男性に限って認めている。

従業員の配置に際して，Aさんは工場内の“アムニーヤト”に細心の注意を払っている。アムニーヤト（amnīyat）とは「安全，保安」を意味するが，治安や肉体的安全だけでなく，公序良俗も含めた広い範囲を含んだ概念である[26]。例えば，**図6**は洗浄工程の様子だが，ここで用いられる洗浄液は120℃に達しており危険を伴う作業である。また，カーディング，コーミング，練条の各工程は騒音が大きく，ヘッドホンが欠かせない。このように肉体的な危険が伴う工程は男性従業員を配置している。その上で，男女の空間分離を徹底するよう労働配置がなされており，結果として前紡・精紡・巻糸工程には女性のみが配置されている（**図7**参照）。なお，生産ラインだけではなく休憩所も男女の空間分離が徹底されており，男性の休憩室やシャワー室は事務所内に配置し，女性専用の休憩所は別棟を用意している（**図8**参照）。「アルダビールの人々は伝統を重んじている。男女別々に働けるようにしっかりマネジメントしないと従業員が嫌がるし，従業員の家族にも迷惑がかかる。社長の私は従業員の生活に責任を持たなければならない。」とAさんは語っている。

男女の空間分離以外にもAさんは従業員の生活全般を支えられるよう，労働法規で定められた社会保障手当以外にも支援を心がけている。例えば，従業員の慶事にはイランの伝統に則って金の宝飾品を贈る，宗教行事やイラン正月に際しては料理を振舞い手土産や特別手当を支給するといった内容だ。こうした心配りはイラン社会では社長の義務とのことだ。また会社内の細部にまで目を行き届かせるため，Aさんは誰よりも早く毎朝6時半には出勤している。

以上，Aさんのインタビューで明らかになったR社の概況は以下のように要約される。革命前のオイルブーム時の社会変化が地方都市にも及んでおり，現在も経済制裁や国際関係の緊迫化がイランの地方経済構造にも影響を与えている。また，業務の様々な局面で親族関係が活用されているが，事業に関して直接的な権限を持つのはAさんだ。そしてイスラーム的倫理観と経営者個人の資質に依存した温情主義的行動規範が職場内慣行に大きく作用している。インタビューの中で，Aさんは従業員一人一人のライフステージや家庭状況，普段の生活風景などを詳細に語っており，なおかつ「イランの社長は皆このような義務を負っている」といった発言が幾度も聞かれた。“イラン社会が求める経営者像”に忠実に寄り添おうとする経営者の姿が見て取れるだろう。

3-2. 従業員の評価

本稿の課題に対する労働者側の認識を明らかにするため，R社の従業員に対してアンケート調

25）朝シフトが8時30分から16時30分，夜シフトが17時から24時までとなっている。

26）ただし単にamnīyatと言った場合，通常は治安や交通安全など「社会全般に関する秩序・安寧ないし物理的な安全」を指す場合が多いが，本稿で語られているamnīyatは本文で後述するように「性別空間分離規範の遵守・尊重」といった要素も含まれている。こうした価値観の構成要素として「性的名誉＝nāmūs」概念が非常に大きな意味を持つことを指摘したい。特筆すべきはnāmūsが労働を通じて毀損され得ること，そして一族のnāmūsを保護・維持することが男性の務めとされる点であり，村上薫〔2005, 2013〕はトルコの事例を通じてnāmūs概念の特徴を詳細に検討している。我々の今回調査を通して「nāmūs」という表現が直接語られることはなかったが，イランにおけるnāmūs概念もトルコの事例と本質的は同じである（Sreberny, A., Torfeh, M. [2013 : 165]）。イランの職場環境とnāmūsの保護，そしてamnīyat概念と経営者が負う責任体系の検討は他日を期すこととしたい。

査と女性従業員に限ってインタビュー調査を行った。アンケート項目は①個人属性（年齢，学歴，婚姻状況，出生地），②仕事について（職種，勤務時間，就業期間，入職理由，仕事に関するコメント）であり，**表5**は回答者の概況を示したものである。なお，アンケート調査に際しても男女それぞれで空間を分けて行うようAさんが配慮しており，この配慮は女性である村上の調査活動にも及んだ[27]。アルダビールにおける男女の空間分離規範が如何に尊重されているかの証左と言えよう。

従業員の傾向として，相対的に女性労働者の方が高学歴者の割合が高く，また婚姻状況もバラエティに富んでいる。なお，大卒以上の女性労働者のうち1名は現在修士課程に在学中であり，学費を貯めるために夏休み期間を利用してR社で働いているとのことだ。勤務時間については，女性従業員が全員「5時間以上8時間未満」と回答しているのに対して，男性従業員は「5時間以上8時間未満」が大多数であるものの「8時間以上」との回答も2名確認された。「男性労働者に限って残業を認めている」というAさんのインタビュー内容と合致する勤務状況である。平均勤続年数は男性7.0年，女性0.8年で男女間に明確な差異が認められた。女性の勤続期間が短い理由についてAさんは「女性は戸外活動がしやすい夏の期間に家計補助や学資確保のために働くケースが多いように思う」と語った上で，「化粧品やお洒落用のお小遣いが欲しいのかもしれないな」と冗談めかしていた。従業員達に給与の使い道を確認したところ，男性従業員は全て「家族のため」「生活費として」と答えたのに対して，先述の修士課程在籍者も含めて女性従業員の2名が「学資のため」と回答している。入職理由については「給料」が15名で最も多く，次いで「興味があった（4名）」「家族を助けるため（3名）」「家族の意見（2名）」「他に仕事がなかった（1名）」「専門分野だから（1名）」「人間としての義務（1名）」となっている（複数回答可）。

「職場で大切なことは何か」という自由記入の設問に対して，ほぼ全ての回答者が「給料」と「アムニーヤト（安全・保安）」を挙げている。「アムニーヤト」の意味するところについてインタビューで確認したところ，特に女性従業員から「ラインの人員配置状況」や「社長の人柄」といった声が寄せられた。したがってここでいう「アムニーヤト」は，物理的な安全確保というよりは，男女の空間分離規範の遵守やそれに対する社長の姿勢を評価していることが分かる。余談となるがインタビュー終了後，未婚の女性従業員が婚約者や交際相手の名前を日本語で書くよう村上にせがむ姿が印象的であった。男女の空間分離規範を尊重することは，近親者や配偶者の名誉を守ることにも直結する。これは未婚者にとっても同様で，婚約者や交際相手の名誉を尊重するからこそ，職場でのアムニーヤトを注意深く評価する必要があるのだ

表5　従業員のアンケート回答者概況

年齢			学歴			婚姻状況		
	男性	女性		男性	女性		男性	女性
20代	1人	3人	小卒以下	4人	0人			
30代	7人	2人	中卒	4人	1人	既婚	12人	2人
40代	4人	0人	高卒	4人	3人	離別	0人	1人
50代	1人	0人	大卒以上	1人	2人	未婚	0人	4人
無回答	1人	1人	無回答	1人	0人	無回答	2人	0人

27）「はじめに」でも言及したとおり，アンケートの配布・回収は村上が担当した。村上単独で男性従業員と対面することはR社の職場慣行からすると好ましくない。その一方で，Aさんや娘婿のHさんが同席するのでは従業員の本音を引き出せないという不安もあったことから，R社業務とは直接関係のないAさん長男が同席することになった。しかし，アンケートの自由記入欄で「職場で大変なことは何か」という設問に対して，男性従業員のほとんどが「大変なことはない」との回答であり，Aさん長男の同席が回答内容に影響を与えたことは否めない。

ろう。

「職場で大変なこと」については，「原料の羊毛のパックを開く時に羊毛が舞って体中に付くこと」「機械の音がうるさい」「立ち仕事なので疲れる」「冬場の寒さ」といった指摘がなされていた。紡績業という業種やアルダビールの気候に起因した環境要因である。特に生産ラインでは，原料の羊毛からは草・泥・塵が，生産品のウールからは細かい繊維が飛び散るため，埃除去がスムーズに行えるよう各所に送風ノズルを設置し，女性従業員には制服とマスクを支給している。女性にのみ制服が支給されているのは，イスラームのドレスコードに即しつつ軽快な動作が可能な作業服が求められるためであろう。

なお, 2016 年 9 月 12 日は犠牲祭[28)]の祝祭日だったが，R 社ではその前日に工場敷地内で子牛が捧げられ従業員たちにその肉が振る舞われた。従業員達に確認したところ，犠牲祭以外にも，シーア派聖人の記念日や追悼行事，革命記念日やイラン正月の前後など，年中を通して肉，振舞料理，菓子類，そして特別手当が支給され，従業員達もそれを楽しみにしているとのことだ。

以上から R 社の職場環境について労働者の評価を考察したい。まず男女共に給与インセンティブが強固に作用しているものの，その使途については女性従業員の方が多様であることが分かる。また男女の空間分離規範が非常に尊重されていること，社長がそれを徹底する姿勢を見せていることが A さんの人格評価のみならず労働条件の評価に直結していることが確認された。さらに労働法規外にも，イランの伝統文化に即した福利・厚生手段を実施している。職場マネジメント全般について，A さんの行動規範は，コストや作業効率よりもどちらかと言えばイランの社会規範を重視しているように見て取れるが，これらは従業員からも肯定的に評価されていると言えるだろう。

28) 犠牲祭ではメッカ巡礼の儀礼が終了する日に合わせて，全世界のムスリムが神に犠牲の動物を捧げ，肉が振る舞われる。犠牲の動物は資力に応じて捧げられるため，経済的に余裕がある者は善行として多くの動物を捧げて，広く肉を振る舞う。

3-3. A さんの生活サイクルと家族・親族関係

ここでは，日常や家族・親族関係から再生産領域における A さんの行動様式を検討することで，アルダビールの地域性やそこで尊重される価値観を明らかにしていく。

先述の通り，A さんは朝 6 時半には職場で執務を開始しているが，出勤前に朝の礼拝も兼ねて近所のモスクに行くこともある。14 時頃，昼食のため一旦自宅に戻り，食事の後午睡を取ったり，礼拝所で礼拝がてら世間話に花を咲かせたりもする。その後，夕方に会社に戻る。夕食は近所に住む娘一家も交えて取ることが多いが，調査が夏場だったこともあり夕食時間は午後 10 時を回ることも珍しくなかった。夕食後にも礼拝所に顔を出すことが多く，したがってコミュニティ活動にはほぼ毎日，日によっては 1 日に複数回というかなりの頻度で参加していることになる。礼拝所での活動内容については次節で紹介したい。その他，家族や親族を誘って，夜間の戸外散策も少なくない。アルダビール市内中心地のショウラビール湖は，市街地にある自然湖としてイラン最大面積を誇る。また市内を流れるマーヒー川に沿って市街地が形成されたこともあり，湖や川沿いにはレクリエーション施設が整備されている。こうした施設で夏を満喫するのがアルダビール市民の楽しみであり，夜中の 2 ～ 3 時頃まで大勢の人で賑わっている。

このようにアルダビールの生活時間は季節性が大きい。寒さの厳しい冬期間は外出を控える傾向にあるが，その分，夏場は活発に外に出歩く。レクリエーションだけでなく親戚や友人間の行き来も自ずと夏場に増える。元々，アルダビールは親戚間の行き来が密な土地柄であるが，A さん宅は特に来客が多い。そのため大勢の来客を迎えられるよう A さん宅は 3 階建ての造りとなっており，1 階と 2 階にそれぞれシステムキッチンが完備されている。また 3 階は来客専用階であり，50 人以上が一同に会せる応接間と客人専用のシャワー，トイレ，宿泊スペースが確保されている。

調査期間中，外国人である村上の存在が珍しかったこともあってか，A さん宅にはほぼ毎日来

客が訪れていた。客人は，親族，会社･事業関係者，A さんの幼馴染など多様な顔ぶれであった。イランでは自宅に客を招待し手厚くもてなす習慣があり，これをメフマーニー[29]と呼ぶ。近親者を招いた 4 ～ 5 人程度の気軽なものから 100 人を超える規模のものまで様々であり，招待の理由も日常的な行き来を始めとして誕生祝い，快気祝い，願掛け，巡礼の挨拶など多様である。地域差も大きく，アルダビールでは女性のみのメフマーニーが多く開催される。主婦が多いこと，男女の空間分離規範が色濃いこと，宵っ張りの生活サイクル（特に夏季）などがその要因と考えられる。そしてイランではミズバーニー（mizbānī）と呼ばれるもてなし文化が尊重されている。特に地方社会において，客もてなしの良し悪しは家族集団の評価に直結し，結果として家名・家業に大きく影響を与えると考えられる。

休日になると，A さんの弟妹家族を中心にレクリエーションが企画される。A さんは 8 人兄妹の長男であり，弟妹の家族も合わせると 20 人～ 40 人規模のレクリエーションとなる。場所や活動内容などは A さんが全て決定しているが，A さんの仕事の都合もあり予定が明らかになるのは直前である。調査が夏期だったこともあり，レクリエーションの大半がアルダビール市郊外へのピクニックだったが，雨天時に R 社工場内でバレーボールやケバブ[30]を楽しむこともあった。またこうしたレクリエーションに仕事関係者が招かれることもあり，A さんの親族は総じて R 社の業務についてある程度の知識・理解を持ち合わせている様子であった。

なお，A さんは自宅でも男女の空間分離規範を尊重している。コーランによれば女性は幼児，近親者など，限られた男性の面前でのみヘジャブ[31]を外すことが許されているが[32]，アルダビールの多くの家庭でもこの規範が尊重されている。この規範に従えば，例えば息子の妻は近親者にあたるため A さんの面前でヘジャブを外すことが許されている。しかし彼女はそうしない。ヘジャブを着用することで，舅である A さんへの心からの敬意を表しているとのことだ。対して A さんは，例えば入室する際には伝統に則り常に「ヤー，アッラー（おお，神よ）」と唱えてから入る。これは女性達に自分の存在を知らせ，服装規定に反することのないよう注意を促す行動である。また戸外活動では女性の一人歩きはさせないよう配慮を徹底している。年長男性として，A さんは親戚集団に対してもアムニーヤトの責任を負っているのだ。

A さんの立居振舞いについて特筆すべきは，親族の集まりで茶菓子や食事の給仕・差配を常に率先して行っていた点であろう。**図 9** は犠牲祭を祝う A さんとその弟妹家族の様子である。何かと気働きの要る犠牲祭に A さんが隅々まで細やかな配慮を見せていたことが印象的であり，このような姿勢は職場でのものとも通じるものがある。

図 9　犠牲祭の A さんと弟妹家族の様子

29）mehmānī（口語ではメフムーニー：mehmūnī と発音）の意味するところは「パーティ」「宴会」であり，アルダビールに限らずイラン全国で共通する慣習である。

30）イラン風バーベキューで羊，子牛，若鶏の肉が多く用いられる。

31）イスラームの教義を遵守するため女性が頭部を覆うヴェールのこと。アラビア語ではヒジャブ (hijab) と発音される。

32）コーランの章句では次のように言及されている。「慎みぶかく目を下げて，陰部は大事に守っておき，外部に出ている部分はしかたがないが，そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう。自分の夫，親，舅，自分の息子，自分の兄弟，兄弟の息子，姉妹の息子，自分の（身の廻りの）女達，自分の右手の所有にかかるもの（奴隷），性欲をもたぬ共廻りの男，女の恥部というものについてまだわけのわからぬ幼児，以上の者以外には決して自分の身の飾りは見せたりしないよう（井筒 [1958：194 － 195]（コーラン第 24 章 “ 光 ” 第 31 節）。」面前でヘジャブを取る事を許された近親者をペルシャ語で「マフラム（mahram）」と呼ぶ。

また, 家族や親族が語ったところではAさんは「もてなし好き」であり，自らミズバーニーを取り仕切ることを好むのだという。こうした「もてなし好き」は次節で取り上げる自宅での社会貢献活動とも通じる行動様式である。また親族内での意思決定に際してはAさんの責任に負うところが大きい。年長男性ということ, 経営者としての地位, コミュニティ活動への積極的な関与などから，家長としての権限をAさんが持つことが親戚で共有されている。こうした家父長的な親族関係をペルシャ語でペダルサラーリー（pedarsarārī）と言う。アルダビールはペダルサラーリーが顕著な土地柄とされるが，特にAさん親族内ではその傾向が強い様子であった。

このように，親族間の行き来が多いことで，伝統的なミズバーニーやそれを尊ぶ価値観に触れる機会が自ずと増える。特にペダルサラーリーの気風が強いAさん一族では，家長を中心とした役割規範が確立されており，親族間の集まりでそれを理解・実践することが求められる。しかもイラン社会では，乳幼児の頃から親戚間の行き来に参加するのが一般的だ。そうすることで場の雰囲気や濃密な人間関係へのスムーズな馴化が期待される。実際にAさん周辺の人付き合いを観察してみると，近親者がホストの指示を仰ぎながら席順や給仕のタイミングや順番，挨拶など，身体化された文化資本[33]伝達の場として機能しており，若年層がこのような場を通じて社会性を身に付けて行く様子が確認された。また，各種交流の場に参加して親族・友人間で認知されることで，資源としての社会的ネットワークへのアクセス権を強固にしていく。このようにして，規範の世代間継承や互恵活動の活性化，価値観の共有が促進されることで，集団の同質性が担保され相互に信頼性が深まっていく。特に革命後のイラン社会では，信頼感を基盤にネットワークを構築かつ積極的に活用することで，様々なコストを圧縮していると考えられる[34]。

以上のように近隣･親族との日常的な行き来は，礼儀･作法の習得, コミットメント／アイデンティティの形成・維持・強化，情報のやりとり－以上の実践の場として機能している。こうした習俗的な知識体系・行動規範の継承は，インフォーマル教育実践の場として大きな意義を持つと考えられる。

3-4. 自宅での社会貢献活動

イランではモスクや礼拝所を拠点として地域住民の自発的参加をベースに多くの慈善活動が展開される。ただし，物理的な制限から近隣住民が気軽に集まることが難しい場合や個人的な願掛けなど，自宅や個人・家族単位での社会貢献活動も少なくない。実際に，Aさん一家が自宅で熱心に社会貢献活動を開催しており，これはアルダビール社会が多くの問題を抱えていることとも密接に関連している。以下ではAさんが自主的に行っている社会貢献活動に注目し，地域社会におけるこれらの活動の意義を考察したい。

Aさんは,「ヘイアト（hei’at:“団体”ないし“委員会”といった意味）」と呼ばれる地域住民主体の互助組織に熱心に参加している。Aさんが参加するヘイアトは男性限定の集会であり，通常，ヘイアトは地域の礼拝所で行われている。毎晩行われる情報交換会・勉強会の他に，週に1度，金曜礼拝前の夜明け前（朝4時頃）から朝9時頃までコーランを読み, 弱者救済の相談会を行っている。毎晩の集会参加者は50人程度，金曜日の朝の集会参加者は150人程度である。Aさんはヘイアトの中心メンバーの一人であり，特に弱者救済事業のために寄付金集めを積極的に行っている。集められた寄付金は，貧困者の結婚資金や疾病助成，貧困家庭の子供向け学資金，被災者への支援，囚人の解放費用として活用されている。例えば今年のイラン正月時に集めた寄付金で374人の囚人が解放された。囚人の解放活動についてAさんは

33）ブルデューによれば文化資本は，①マナー・言葉遣い・教養など身体化された文化資本，②学歴・資格など制度化された文化資本，③書物・絵画・道具など客体化された文化資本―以上の三つの様態があるという。そして家族はそれぞれに，この3つの様態の文化資本を持っているが，それらは相互に深く関連し合う（天野・藤田・苅谷〔1998：165〕）。

34）村上〔2011〕。

「こうした囚人は交通違反や密輸[35]など，軽微な罪で捕まったが罰金が払えずに囚人となってしまった人々だ。これらは“ビーゴナー”だ。彼らが収監されている間，家族たちはお金もなく大変な思いをしている。家族が困っているのだから助けてやらなければ。」と語っている。“ビーゴナー（bīgonāh）”とは「（宗教・道徳上）無罪」という意味である。罰金の支払いで解決できる事案の中には「人間の過ち」として寛容に対応するのが望ましいものもあり，A さんを初めとしたヘイアトの面々は“ビーゴナー”な事案に限って解放の手助けをしており，1 年に 3 ～ 4 回の頻度で囚人解放を行っているとのことだ。

さて，こうした礼拝所ベースに実施されるヘイアトについて，A さんによれば活動内容は向上の余地があり，地域の人々が弱者救済により積極的に関わるべきだという。そのため，A さんは年に 2 回，自宅をヘイアトのために開放し，寄付金活動への参加を呼びかけている。ヘイアトは通常 2 ～ 3 日間かけて行われ，例年の参加者は多い時でのべ 1000 人以上になるという。この自宅でのヘイアト実施には，妻の B さん（50 代，専業主婦）が大きく貢献している。ヘイアト自体は男性の集会であり，集会の最中に妻の B さんが参加者の面前に現れることはない。しかし，会場設営や伝統に則した 1000 人分のふるまい料理・茶・菓子・果物の用意等，B さんの献身なしにはヘイアトは成立しない。A さん宅のヘイアトで振る舞われるメイン料理は「ハリーム」という肉の入った甘いお粥だ（**図 10** 参照）。体力をつけたい時に好んで食されるイランの伝統料理だが時間もお金もかかる。つまり 1000 人分に上るハリームの調理は肉体的・金銭的・時間的に莫大なコストを要する。実は A さんが自宅ヘイアトで振る舞うまでアルダビールではハリームを提供する飲食店がなく，「滅多に食べられない家でのご馳走」といった位置付けだった。しかし A さんの自宅ヘイアトでのハリームが評判を呼び，今ではハリームを供する飲食店がアルダビール市内に 5 ～ 6 店存在するという。

またヘイアト以外にも会社経営で培った人脈を活用して，A さんは自宅でアルダビールの社会問題解決のための情報交換会を行っている[36]。この情報交換会は通常，男性参加者のみで進められていく。実施は不定期であり，A さんが仕事先の来客を急遽招いて行うことも多い。開催時間も不定で，時には夜遅くまで話し合い，客人を自宅に泊めることもある。したがって，B さんはいつでも自宅で客人をもてなせるよう，常に数十人分の食材を用意している。また A さん夫妻の息子や娘婿が在宅の場合は，ホスト役として A さんと共に場を切り盛りする。

しかも，A さんの社会貢献活動は礼拝所や自宅だけには留まらない。あるテレビ番組で困窮者への支援者募集の呼びかけを見た A さんは即座に協力を申し出た。番組内での告知は「経済的に問題を抱える 15 人の女性達について，自立支援の方策を考え実行出来る方はお申し出ください」といった内容であった。A さんの提案は「ペルシャ絨毯織りによる自立支援策」であり，「必要な資金・生活費をこれから制作するペルシャ絨毯を担保に前貸しする」との内容である。紡績業で培った人的ネットワークや原材料供給システムを存分に活かしたこの支援策は採用され，後日特集番組が組

図 10　ハリーム

35）スピード違反や駐車違反，事故処理に際した小競り合いなどで課せられた罰金が払えずに刑務所に入るケースが後を絶たないとの情報は，筆者もこれまでイラン各地で見聞きしてきた。また密輸については，衣料品，靴，鞄，時計など日常用品の取引が相当量にのぼり，正規輸入品の認証シール制度を整備するなど近年，イラン政府は対策に本腰を入れている。

36）州内辺境地での治安の悪化や薬物問題，遊牧民の生活向上，環境問題，経済的弱者への支援策，NGO の活用法など，話題は多岐に渡っていた。

まれることとなった。

なぜこのようにA さんは社会貢献活動を熱心に行うのだろうか。コマーシャル活動の一環として社会貢献活動を行っているのではないか，税制上の優遇措置があるのではないか，もしくは経営者一家は地域での社会的評価を高める必要があるのではないか－我々のこうした問いに対してA さんの答えは，社会貢献活動を積極的に行うのは「人間の義務」であり，またB さんの答えも夫の人助けをサポートすることが「人間の義務」であるという。他方で，A さんの息子達やその妻にA さんの社会貢献活動の所感を尋ねてみた。彼らによれば，A さんの社会貢献活動は年々規模が大きくなっていたが，B さんが膝を壊してからは自宅でのヘイアトの規模を縮小したという。「自宅でのヘイアトはナズリー（願掛け）の一種だ。ナズリーの内容は本人にしか分からないが，おそらく家族や従業員の健康と平安を祈っているのだと思う。願掛けする際，『去年は 300 人に料理を振る舞ったので，今年はそれよりも多い 500 人に振る舞います』といった具合に実践内容を相対的に高くしていくことで，祈願の成就を期待しているのだろう。」（長男談）

A さん一家の事例から，個人・家族単位での慈善活動が社会保障制度の間隙を埋めている様子が見て取れる。慈善活動の動機としては伝統的な願掛け行為「ナズリー」の実践が考えられるが，これは企業家ないし家長としての責任を全うするための形而上的手段と捉えられる。他方でアルダビールの土地柄から，男女の空間分離や役割規範が個人宅でも強固に作用している様子も確認された。そうした中で，B さんが専業主婦としての活動の中で「夫の社会貢献活動への全面的なバックアップ」を行い，弱者救済事業を下支えしている。また子供世代やその配偶者もこうした活動に関与させることで，ロールモデルの共有，ジェンダーや互恵など社会規範の再生産の場としても機能していることが分かる。イスラーム共和制を採用するイランでは，家族を基本単位とした社会統合論理が展開されているが，こうした「上から規定される統合論理」に呼応する形で，家庭単位での善行が実践されている様子が伺えよう。

おわりに

以上よりA さんの日常では，生産領域である会社組織，再生産領域である家庭・コミュニティ活動の中でもイスラーム的倫理観が強く作用していることが分かる。職場における空間分離の徹底とその価値観を共有することで，従業員が安心して働ける環境を実現させていた。アルダビール州の女性の労働力化率が高く失業率が低い背景には，このような伝統的価値観の尊重が関係していると思われる。モガダムが指摘するように「現代性（モダニティ）」と「伝統」は相反する要素ではなく，特に地方社会では両者の共存こそが発展の鍵を握ると言えよう。

またA さんの事例から，個人の問題意識によって社会保障制度の間隙を埋める規模の社会貢献活動が行われていることが分かる。A さん以外にも，有力者を中心とした社会貢献活動の事例はアルダビールの各所で観察された。これらの詳細は別稿に譲るが，個々人の良識が地方社会の秩序や安定を支え，同時に役割規範の再生産システムが広範に作用していることが確認された。A さんが経営者として，また地域の有力者として自らを律し家族が全面的に協力するのは，こうした役割規範の再生産システムを地域で共有していることの表れかもしれない。

他方で調査を通じて，保守的な生活様式を敢えて守ることに現代的な意義を見出している様子が様々な局面で確認された。親族・友人間の密な行き来やもてなしの作法，服装規範，役割規範，また食事や音楽，婚姻に関わる諸手続きなど，アルダビール特有の習俗・価値観が尊重されていた。これらは旧態依然とした静的な社会関係を意味するものではなく，刻一刻と変化するイラン社会の中で地域固有のアイデンティティを確立する営みと言えるだろう。

R 社の現状や紡績業という業種に着目すると，国際関係や中央政治に代表されるマクロの動態が，地方産業にも大きな影響を与えている点が確

認された。地場産業（ここでは絨毯産業）の川上部門として発展を期待された羊毛紡績であるが，現在は域外との取引に活路を見出さざるを得ない状況となっている。このような現状に対処するため親族ネットワークが活用されており，しかも日常での伝統的な生活スタイルの踏襲を通して，その維持と強化が図られていた。したがって，生産領域／再生産領域には融節的要素が認められる。また再生産領域における家父長的社会関係と生産領域における温情主義的統合論理は同一線上に位置付けられるだろう。

今後の課題としては，習俗的なインフォーマル教育の実践とそれが作用する領域の構造化が挙げられる。A さんの周辺では家族・親戚集団・近隣コミュニティをベースとした多様な教育の実践が確認された。イランでは宗教倫理をベースに性別役割規範が推奨されており，文化資本伝達の場としてインフォーマル教育のあり方は経済社会構造全体に大きく影響する上に，社会関係資本や経営資源としての人的ネットワークの構築・維持・強化といった側面も持つ。今後はこうした構造解明に力を入れたい。

またイランの地方都市特有の課題として，外国人が関与する活動に対して，公的機関が情報公開に消極的となっている点が挙げられる。特に州独自の統計資料については，州当局の許可が下りず今回の調査で入手することが出来なかった[37)]。

いずれにせよ，アルダビールおよびイラン社会の中で本稿の考察がどのように位置づけられるか，フィールド調査の更なる積み重ねが求められる。

37）研究の趣旨と我々の身分を保障する旨をハサンザーデの所属先機関であるモハッゲグ・アルダビール大学に文書化してもらい，州当局と何度か折衝を行った。しかし，我々が調査する数ヶ月前にフランスの映画関係者やスペインの研究者に州内統計資料を提供したところ，政治活動に利用されるなど州当局にとって好ましくない行為があった。結果として，アルダビール州当局編纂の統計資料は「イラン国外で外国人が成果報告することが想定される全ての活動」に対して当面の間，新たな提供を見送るとの回答であった。

付記：本稿は JSPS 科研費（挑戦的萌芽研究）16K13120「イランの社会貢献活動から見る性別役割規範：女性が担う仕事概念の検討を通じて」の成果の一部です。

参考文献

天野郁夫，藤田英典，苅谷剛彦，1998，『改訂版　教育社会学』，放送大学教育振興会。

井筒俊彦訳，1958，『コーラン（中）』，岩波文庫。

大野盛雄，1990，『イラン農民 25 年のドラマ』，NHK ブックス。

後藤晃，2002，『中東の農業社会と国家：イラン近現代史の中の村』，御茶の水書房。

駒野欽一，2014，『変貌するイラン：イスラーム共和国体制の思想と核疑惑問題』，明石書店。

鈴木均，2011，『現代イランの農村都市：革命・戦争と地方社会の変容』，勁草書房。

館山豊，1998，「不十分な分配国家イラン：シャーのイランとホメイニのイラン」，『茨城大学人文学部紀要社会科学論集』，Vol.31，25-45。

富田健次，1993，『アーヤトッラー達のイラン：イスラーム統治体制の矛盾と展開』，第三書館。

富田健次訳（R.M. ホメイニー著），2003，『イスラーム統治論・大ジハード論』，平凡社。

原隆一，1990，「ホシュネシィーン：イラン農村における土地なし層の構造と動態を中心に」，『オリエント』，33（2），96-105，日本オリエント学会。

村上明子，2011，「イランにおける女性就業の現状：テヘラン市・ホワイトカラー層の事例分析」，『経済社会学会年報 Vol.33』，151-162。

————，2013，「イラン労働市場をめぐる一考察：制度･政策･現状認識に関する覚書」，『經濟學研究』（北海道大学），第 62 巻第 3 号，153-172。

村上薫，2005，「トルコの女性労働とナームス（性的名誉）規範」，加藤博編『イスラームの性と文化（イスラーム地域研究叢書第 6 巻）』，東京大学出版会，47-66。

————，2013，「トルコの都市貧困女性と結婚･扶養･愛情：ナームス（性的名誉）再考の手がかりとして」，『アジア経済』，第 54 巻第 3 号，アジア経済研究所，28-47。

吉村慎太郎，2005 年，『イラン･イスラーム体制とは何か：革命・戦争・改革の歴史から』，書肆心水。

Central Bank of Iran, 2016, Annual Review 1393 (2014/2015).

Katzman, Kenneth. , 2016, Iran Sanctions, CRS Report, Congressional Research Service.

Lambton, Ann K.S., 1953, Landlord and Peasant in Persia: A Study of Land Tenure and Land Revenue Administration, Issued under the auspices of the Royal Institute of International Affairs, Oxford University Press.

Mehran, Golnar, 2003, The Paradox of Tradition and Modernity in Female Education in the Islamic Republic of Iran, Comparative Education Review, p 269-p286.

Moghadam, Valentine, 2005, Women's Economic Participation in The Middle East What Difference Has The Neoliberal Policy Turn Made?, Journal of Middle East Women's Studies, Academic Research Library, p110-p146.

Sreberny, Annabelle., Torfeh, Massoumeh., 2013, Cultural Revolution in Iran: Contemporary Popular Culture in the Islamic Republic, I.B.Tauris.

Statistical Center of Iran, 2016a, Selection of Labor Force Survey Results : Year 1394.

Statistical Center of Iran, 2016b, IRAN STATISTICAL YEARBOOK 2013-2014.

Wulff, E. Hans, 1966, The Traditional Crafts of Persia: Their Development, Technology, and Influence on Eastern and Western Civilization, The Massachusetts Institute of Technoligy. (ハンス・E・ヴルフ／大東文化大学現代アジア研究所慣習／原隆一，禿仁志，山内和也，深見和子訳, 2001 年,『ペルシアの伝統技術：風土・歴史・職人』，平凡社。)

Khamenei.ir, eblāgh-e siyāsthā-ye kolī barnāme-ye touseʿe-ye shshom（第 6 次 5 ヵ年計画政策体系の通達), 30 July 2015. <http://farsi.khamenei.ir/news-content?id=30128>
（最終閲覧日：2016 年 11 月 15 日）